

# 『看聞御記』に再生した「をかし」 美意識としての「殊勝」

アダム ベドゥナルチク  
Adam BEDNARCZYK

## はじめに

後花園天皇の父にあたる後崇高院伏見宮貞成親王は、龐大な『看聞御記』（または『看聞日記』）を後世に書き残した。この日記は興味深い話題に富んでいる。横井清によると、「諸般の事情をまことに賢明に判断して呑み込んでしまい、丸坊主となり、禁裏と幕府の双方に適切な眼くばりも果たしながら、しかも都鄙の「衆庶」の生活と心情にも深い関心を寄せつづけた」<sup>①</sup>のである。その点では、応永23年（1416）から文安5年（1448）までを記録した貞成親王の日記は、15世紀前期の宮廷や幕府、さらには世俗の出来事などを生き生きと描いた、唯一の多側面的な資料である。しかし、その中に記述された雑多な物事は別として、『看聞御記』において注目されるのは、作者が頻用した「殊勝」という表現である。「殊勝」の語義は「殊に勝れている」と解釈でき、もともと勝れたことを褒めるのに使用されていた言葉である。貞成親王の作品におけるこの表現に、特別の意味合いがあるのか、あるいは単に作者個人が好んで使う傾向にある口癖なのかは、明らかでない。しかし、「殊勝」が使われた様々な場面を見れば、この表現が「優秀」「風流」「興味深い」などの意味を持つことが明確にわかる。このような意味範囲の観点から考えると「殊勝」は、平安時代の王朝文学を捉える上での文学理念・美的理念ともされる「をかし」の広い意味範囲とある程度一致していると言える。『看聞御記』にみられる「殊勝」の頻用は、この言葉が、当時の固有の美意識の一種として用いられていたことを示唆しているのではないだろうか。それ以前に用いられた「をか

し」という表現はこの時代には、すでに見られない。つまり、貞成親王は、「をかし」という表現を使った平安王朝貴族と同様に、趣がある・興味がひかれる・賞美したい等の感動体験を主情的に詠嘆する際に、「殊勝」を用いていたと観察することもできる。これまで、この問題については研究がなされてこなかった。そこで、本発表では、『看聞御記』におけるこの表現の分析を通して、「殊勝」の様々な意味について考えていきたい。

## 一. 殊勝とは

### (一) 殊勝の語義

大漢和辞典【殊勝】㊦とりわけてすぐれる。〔朱熹、梅花詞〕天然殊勝、不<sub>レ</sub>關<sub>二</sub>風露冰雪<sub>一</sub>。㊦けなげ。奇特。神妙<sup>②</sup>

漢語林【殊勝】㊦とりわけてすぐれる。㊦〔国〕㊦けなげで感心なこと。奇特。「殊勝な心掛け」㊦こうごうしいさま<sup>③</sup>

漢字源【殊勝】㊦特にすぐれている。㊦〔国〕けなげでりっぱであること。奇特<sup>④</sup>

源泉国語大辞典【殊勝】㊦特にすぐれていること。格別。\*今昔<sub>二</sub>二・二五「福德長命殊勝にして」㊦おごそかであるさま。\*虎寛本狂言・因幡堂「いつ参てもしんしんと致いた殊勝な御前で御ざる」㊦心がけがはっきりしていること。けなげなさま。「殊勝な心がけ」<sup>⑤</sup>

字源【殊勝】㊦とりわけてすぐれる。〔朱熹、梅花詞〕天然――、不<sub>レ</sub>關<sub>二</sub>風露冰雪<sub>一</sub>。㊦國けなげ。奇特<sup>⑥</sup>

古語辞典【殊勝】㊦特にすぐれていること。「その後法巖、法花の功德一なる事を知りて」〈今昔一三ノ三久〉㊦けなげなこと。神妙。奇特。「殊勝なる狂言にをかしき談義」〈俳・世話尽二〉<sup>⑦</sup>

古語辞典【殊勝】㊦特にすぐれたさま。格別よいさま。徳などの驚嘆にあたいするさま。「其の中に一の一巻ありけるを」〈今昔・七〉㊦神々しいようす。ありがたく思い、感じ入るさま。「一・なる義なれば、老若男女

ともに参詣多し」〈浮・胸算用・西鶴〉㊦けなげなようす。感心なこと。  
奇特。「若い衆下向か、一・にござる」〈浄・油地獄・近松〉<sup>㊧</sup>

## (二) 仏教語としての殊勝

「殊勝」という表現は仏教のコンテキストにも出てくるのである。木村宣彰によると、17世紀初めにイエズス会の宣教師が編纂した『日葡辞書』における「殊勝」の語義は「Cotoni sugururu」と解釈されている。また、勝れたことを褒めるのに用いる語と説明された「殊勝」は、説教や信心などとの関連によって、その語法を説明している。しかも『無量寿経』は、仏の威徳を「殊勝にして希有なり」といい、阿弥陀仏が法蔵菩薩の時に立てた一切衆生を救う誓願を「無上殊勝の願を超発せり」と称讃している。

さらには、「仏の教法を『殊勝の法をききまいらせ候ことのありがたさ』（蓮如『御文』）といい、仏のすぐれた智慧を『殊勝智』と呼んで讃嘆する。このように仏・菩薩の教えや智慧だけでなく、場の雰囲気甚だ厳粛なことを『殊勝の気』と表現する。」<sup>㊨</sup>

## 二. 「殊勝」と「をかし／おかし」

### (一) 「をかし」の意味

「をかし」の原義<sup>㊩</sup>は、「自分の手もとに招き寄せて賞美したいという意味」を表し、「快い明るい気持」を含む「肯定的な感情」を持つ語ということになる。その場合、「主体と対象とが生活的、行為的な持続的関係を持た」ず、「主体が自分の姿勢を崩さずに自分を立て通すことによって、愛賞する気持が〔をかし〕となることは言うまでもない。<sup>㊪</sup>また、土屋博映によると、「をかし」の文学と呼ばれた『枕草子』における「をかし」は、「一定の距離を設定して対象を「観る」とともに、「好意的に興味を持って迎えたい」という「快の感情」において、能動的に「自分の手もとに招き寄せて賞美したい」と「感ずる」調和的、陽性的な美的体験であることという注解も加えられている<sup>㊫</sup>。

## (二) 「をかし」のほうから見た「殊勝」

「をかし」を「殊勝」と比較するならば、意味内容上では、「をかし」の方が意味合いの範囲が広いと思われる。上記のように、前者は面白くて美しく興味や心がひかれる、魅力やすばらしい趣がある、または面白くてつい笑いがこぼれる感じにもかかわる言葉である。後者は特にすぐれていること、つまり非常に珍しくて面白くて賞すべきである、興味や心がひかれるため、立派で趣のあることにかかわる言葉である。<sup>13</sup>したがって、両者の語はものごとの見事さを表現しており、それらの意味内容は同様に重なり合っているといえる。勿論、「をかし」が、はなやかな情趣や滑稽な笑いの意にひろがる傾向を持つという別の意味合いで用いられるのに対して、「殊勝」は、神妙なものや勇壮なものに対して抱く感情から、心的イメージをいう美学上の概念である「崇高」に至るまで、広い意味合いで使用されている言葉である。このため、「をかし」と「殊勝」は、たいてい類似した意味で把握できるにもかかわらず、場合によっては、両者の意義が相互に対立していることもある。

## (三) 「をかし」と「殊勝」との対立

14世紀の中期に至って、両者の語の意味は対立していたと推定できる。そのような意味の違いは例えば『徒然草』の第二百三十六段においてははっきりしている。具体的な例を挙げてみよう。

御前なる獅子・狛犬、背きて、後さまに立ちたりければ、上人いみじく感じて、「あなめでたや。この獅子のたちやう、いとめづらし。ふかき故あらん」と涙ぐみて、「いかに殿原、殊勝の事は御覽じとがめずや。無下なり」といへば、おのゝあやしみて、「誠に他にことなりけり。都のつとにかたらん」などいふに、上人なほ床しがりて、おとなしく物しりぬべき顔したる神官を呼びて、「この御社の獅子の立てられやう、定てならひあることに侍らん。ちと承はらばや」といはれければ、「その事に候。さが

なきわらはべどもの仕りける、奇怪に候ことなり」とて、さしよりて、すゑなほして去にければ、上人の感涙いたづらになりにけり。<sup>14</sup>

秋に京都の亀岡にある出雲大社に参詣した聖海上人らは、神前にある魔除けの獅子と狛犬が互いに後ろ向きに置いてあったことに非常に感動した。ボロボロ泣きながら皆がそれらの格別に素晴らしい姿を鑑賞して「本当に不思議な獅子狛犬だ」、「都に帰って土産話にしよう」などと言い出したのである。ここで「殊勝の事」は、珍しくて面白い獅子と狛犬の立ち方を示している。しかし、これに対するものとして、「をかし」が用いられた若干の抜粋を引用してみよう。

#### 第十二段

同じ心ならん人と、しめやかに物語して、をかしきことも、世のはかなき事も、うらなくいひ慰まんこそうれしかるべきに、さる人あるまじければ、露違はざらんと向ひるたらんは、ひとりあるこゝちやせん。<sup>15</sup>

#### 第十四段

和歌こそ、なほをかしきものなれ。あやしもしづ・山がつのしわざも、いひ出つればおもしろく、おそろしき猪のしゝも、「ふす猪の床」といへば、やさしくなりぬ。<sup>16</sup>

#### 第十六段

七夕まつるこそなまめかしけれ。やうへ夜寒になるほど、雁なきてくるころ、萩の下葉色づくほど、早稲田刈り干すなど、とりあつめたる事は秋のみぞ多かる。また、野分の朝こそをかしけれ。言ひつゞくれば、みな源氏物語・枕草子などにことふりにたれど、同じ事、また、今さらに言はじともあらず。<sup>17</sup>

『徒然草』における 40 余りの「をかし」の用例のうち、上記の 4 例は、自然

や和歌などの面白さ・美しさに幅広く言及している。ここに挙げた抜き書きは、鎌倉末期の「殊勝」は、「をかし」と関係なく用いられていることを示す。また、特徴的なのは、この「をかし」が依然として平安期にみる「をかし」に類似した意味合いを持つことであろう。

### 三. 『看聞御記』における「殊勝」

伏見宮貞成親王の日記には「殊勝」の用例が233例見られる。「殊勝」の対象は広範囲にわたるため、その対象の種類によって、いくつかのグループに分類できる。すなわち、次のような七つである：①自然、②身回り品、③書画、④歌、⑤娯楽、⑥宗教、⑦その他。

以下には、比較のため、中古・中世文芸にみる「をかし」のくだりを、『看聞御記』における「殊勝」の記述と並列しつつ、それぞれのグループを概観する。

#### (一) 自然にかかわる件

貞成親王のお膝元の地については、横井が「伏見庄の村々や神社を包んでいた自然の景物は、まことに豊かであった。梅や桜や紅葉のことは言わずもがな、季節の移ろいに応じて山野・水辺に咲く花草の数々が、この地に生きた人びとの心を慰めていたし、御所に飛び込む鶯もおれば、散策の途次に一声響かせて貞成の脚を止めさせる郭公ほととぎすもいた。また、鳴き声を立てて貞成の耳を傾けさせる鹿などの獣たちも、時には御所のつい近くに出没していた […] この伏見の里にも、ひととせを区切り、四季を彩る祭礼やら行事やら遊びがあって、この地に住む人びとを愉しませていた。それらは『看聞御記』の随所に写し出されており、自然の景物とあいまって、日記の世界をいっそう豊かで生き生きとしたものにしていたのである」<sup>18</sup>と記している。貞成は、周囲の用心深い観察者だったのであり、日記にも自然の景物に対して「殊勝」の表現を用いて記録したくだりが相当に多い。この「殊勝」の言葉は、作者が普通に花草や紅葉や月

などの華麗さを描くために使用しているのである。まず月を中心とした記事を見ると、次のとおり見事な様子が偲ばれよう。

(1) 『看聞御記』<sup>⑨</sup>

- (1.1) 応永 25 年 8 月 15 日 […] 今夜名月殊更殊勝也。依無人不能詠吟。一身聊吟詠。賞翫殊更有之。
- (1.2) 応永 29 年 5 月 17 日 晴。正永盃酌聊申沙汰。夜又松崖被來。月殊勝間聊酒宴。明盛詠一聲有其興。
- (1.3) 応永 31 年 9 月 13 日 雨降晚景晴。今夜名月。天有心歎。月殊更殊勝也。賞翫之儀如例。宰相以下候。短册取重不及披講無念也。詠歌人數。予。松崖。[…]
- (1.4) 永享 3 年 8 月 15 日 […] 天氣快晴近比無爲之儀也。見物旁自愛無極。今夜名月殊勝不及詠吟無念也。[…]

応永 29 年 5 月 17 日の夜に開かれた酒宴に際して、参加者の皆、一声で歌を詠んでいた折、貞成は、明るい月が殊勝であると記録した。しかも特に秋の八月の月は貞成の目を惹いたと考えられる。例えば、永享 3 年 8 月 15 日条 (1.4 を参照) に、「天氣は快晴。近頃は何もすることがなく、すごく暇でしょうがない。あれこれを見物し、自分をたいせつにすることは限りない。今夜は、名月がとても美しいのに上手に歌を詠むこともできず残念で悔しい」と記されている。『看聞御記』における八月や九月の月見については、貞成親王は通例では、「今夜名月賞翫如例」（今夜はいつものとおりに名月を賞翫した）と述べているのが見られる。なお、このような月の景色と同様の風景が、平安朝文学における「をかし」という表現によって描写されている記述もある。以下に『源氏物語』と『更級日記』などにみる用例をあげてみよう。

## (2) 『源氏物語』

〈末摘花〉命婦は、繼母のあたりは、住みもつかず、姫君のあたりをむつびて、こゝには来るなりけり。のたまひしもしるく、十六夜の月をかじきほどに、おはしたり。<sup>20</sup>

## (3) 『更級日記』

又の年の八月に、内へ入らせ給に、夜もすがら殿上にて御遊びありけるに、この人の侍ひけるも知らず、その夜は下にあかして、細殿のやり戸を、しあけて見出したれば、あか月方の月の、あるかなきかにおかしきを見るに、履の聲聞えて、讀經などする人もあり。<sup>21</sup>

〈末摘花〉帖の、新春正月十六日の夜に姫君の琴を聴くというところには、十六夜の月が美しい晩であったとある。また、菅原孝標の娘も、東山に籠っていた時、八月になって、二十日すぎのある夜明け方の月がまことに趣深かったことなどを書き留めた。ところで、『看聞御記』によると、伏見庄の広い領内に相当数多くの神社があり、すなわち大寺もあれば小庵もあり、祠などを含めればさらに数は増すだろうという様子がわかる。その御所近辺の退藏庵・藏光庵・即成院・大通院・指月庵などは紅葉の名所であった。九月上旬から十月、十一月上旬までは、紅葉の美しい季節となるので、親王は、近侍の人々を相伴させ、しばしばあちこちの小寺などを遊覧したり、紅葉狩りに行ったりすることが多かった。<sup>22</sup>それらの逗留の様子については詳細な記述が残されている。紅葉の盛りの遊覧を描いた記録には、次のような記述もある。

## (4) 『看聞御記』

(4.1) 応永 26 年 10 月 30 日 晴。御香宮參詣有立願。心經三卷自寫令奉納。

歸路之次退藏庵紅葉一覽。殊勝也。[…]

(4.2) 応永 27 年 10 月 28 日 晴。紅葉盛之間。退藏庵。藏光庵歷覽當年紅

葉添色超過近年。甚以殊勝握翫無極。[…]



(4.3) 永享3年10月10日 晴。鳴瀧殿歸寺。抑紅葉遊覽。[…] 先藏光菴  
紅葉殊勝也。[…]

(4.4) 永享10年10月30日 朝時雨廳晴。源中納言。大藏卿爲清。重賢。  
明盛。定直。慶俊等西芳寺參。大藏卿張行。紅葉など爲歷覽云々。晚景  
歸參。於寺家齊食。其後乗船。寺中悉廻覽。紅葉得盛殊勝云々。谷堂等  
歷覽云々。[…]

応永27年10月28日条にうかがえるように、紅葉の盛んになる季節であった。貞成は、桃山町松平筑前の地にあった退蔵庵と蔵光庵を歴覧した時、最近の数年間と比べれば当年の紅葉の葉色のほうが美しくて殊に優れており、愛好する限りがなかった(4.2を参照)と記した。さらに、貞成が永享10年10月30日に書き記したところによると、その日は松尾の西芳寺さいほうじを訪問した大藏卿ごじょうためきよ五条為清らが「紅葉など爲歴覽云々」(紅葉などを見て回ったという話である)。寺家での齊食の後、皆が船に乗って、寺の境内にある小寺庵を隈なく巡覽していた時に綺麗な紅葉が賞美できたのである(4.4を参照)。これと同様の紅葉の風景は『更級日記』などにも見える。すなわち、

#### (5) 『更級日記』

又初瀬に詣づれば、はじめにこよなく物たのもし。所々にまうけなどして、行きもやらず。山城の國は、その森などに、紅葉いとおかしきほど也。<sup>23</sup>

とある。日記の作者は再び初瀬へのお参りに際して、山城の国の「ははその森」などでは、紅葉がたいそう趣のある季節であると注目した。

しかし、自然に対して用いられている「殊勝」の表現の大部分は、梅・桜・躑躅・薔薇など色々な花の美しさを描くくだりにある。それは、例えば以下に列挙した記事に明らかである。

## (6) 『看聞御記』

- (6.1) 応永 26 年 3 月 27 日 […] 庭躑躅盛也。殊勝足握翫。一獻數巡。予又讀瓶召寄躑躅賞翫。醉中比興也。
- (6.2) 応永 27 年 2 月 12 日 晴。[…] 大光明寺。藏光庵等參燒香申。御喝食。廊御方。上藤同參。次退藏庵。即成院等梅花見之。盛殊勝也。[…]
- (6.3) 応永 29 年 7 月 28 日 晴。入風爐。其後永松菴二行。草花一覽。言語道斷殊勝也。此間諸人見之令賞翫云云。[…]
- (6.4) 永享 9 年 2 月 29 日 晴。源宰相一兩日伏見へ罷下歸參。御所庭前八重櫻得盛殊勝云々。無賞翫之人閑素寂寞云々。[…]

応永 27 年 2 月 12 日は天気が快かった。その日に貞成はさまざまなお寺を巡覧した。大光明寺や藏光庵などの本尊に対して香をたき、そして、次に退藏庵やそくじょういん即成院で盛りの梅の花を觀賞した、ことが見られる (6.2 を参照)。また春にも、御所の庭前に八重桜の咲き誇る折、この花は殊勝だ、とある (6.4 を参照)。秋になったおり、貞成親王は永松庵に行つて草花を見て、「言語道斷殊勝也」(言葉で言い表せないほど極めて美しい) と記録した (6.3 を参照)。なお、花に対する上記のような「殊勝」の言葉遣いは、平安時代の作品にみる「をかし」の言葉遣いと符合していると考えられる。このような言葉遣いの用例を具体的に挙げてみよう。

## (7) 『源氏物語』

- (7.1) 〈竹河〉廿七八の程に物し給へば、いと、よくとゝのひて、この御有様どもを、「いかで、いにしへ思しおきてしに、違へずもがな」と、思ひ居給へり。お前の花の木どもの中にも、匂ひまさりて、をかしき櫻を、折らせて、[…]<sup>24</sup>
- (7.2) 〈東屋〉暗うなれば、出で給ふ。下草の、をかしき花ども、紅葉など、折らせ給ひて、宮に、御覽せさせ給ふ。<sup>25</sup>

## (8) 『枕草子』

(8.1) 〈第四四段〉[…] 桐の花、紫に咲きたるはなほをかしきを、葉のひろ  
ごり、さまうたてあれども、又他木どもとひとしう言ふべきにあらず。

[…]

(8.2) 〈第七〇段〉[…] 雁緋の花、色は濃からねど、藤の花にいとよく似て、  
春と秋と咲く、をかしげなり。[…]

## (9) 『徒然草』

〈第百三九段〉梅は白き、うす紅梅。ひとへなるが疾く咲たるも、かさ  
なりたる紅梅の匂ひめでたきも、みなをかし。おそき梅は、さくらに咲  
き合ひて、覚えおとり、けおされて、枝にしほみつきたる、心うし。

[…]<sup>26</sup>

『源氏物語』の〈竹河〉にみるように、三月の花盛りの玉鬘邸にいる二十七、  
八歳くらいのととても恰幅の良い姫君たちが庭先の花の木々の中で色合いの優れ  
た美しい桜を見つけ、その枝を折らせたという場面がある。〈東屋〉帖にも、  
薫が弁の尼に頼んで出る場面で、彼は浮舟の住まいを離れ、木の下草の美しい  
花々や紅葉などを折らせて宮に贈呈するように持って帰ったとある。『枕草  
子』の〈第四四段〉では、清少納言が木の花について述べる箇所、紫に咲い  
ている桐の花は美しくて綺麗であると記した。また、〈第七〇段〉においては、  
同じ作者が雁緋かんび（岩菲の別称）の花の美しさに言及し、藤花の色によく似てい  
る花のため、珍しくて美しいと、感想を述べている。さらに、前述のように、  
『徒然草』の〈第百三九段〉においては「匂ひめでたき」白梅や紅梅が賞美さ  
れており、「みなをかし」と作者に高く評価されている。

## (二) 身回り品にかかわる件

「四季に彩った祭礼やら行事やらの間には、いろいろな遊戯が散りばめられ

ており、それらも『看聞日記』の中に見えつ隠れつしながら、読む者の心を一瞬なごませてくれている。[…] 伏見に引き籠りがちの貞成にとっては、「室内」での楽しみに趣向を凝らし、工夫を重ねることが、生き甲斐の一つであったようだ。その楽しみには、連歌会あり茶会あり花の会<sup>②⑦</sup>等々のイベントが催されていたようだ。例えば、順事茶という茶会に当たっては、茶堦・呉器・壺・箱等々が載せられたことがうかがえる。このような珍品が風流で人目を惹いたのは想像し難くないであろう。美術品や趣味の品などの鑑識にすぐれていた貞成親王は、色々な身回り品にも気づき、それらの美点を理解できたと思われる。『看聞御記』にみられる折り箱や置物などの美しさの描写から、作者の美的感覚も確かに把握することができる。なお、日記は身回り品について次のように伝えている。

#### (10) 『看聞御記』

(10.1) 永享3年4月13日 […] 自室町殿折六合<sup>有囊。茶子色々。賜之。以絹花筋之。</sup>。上臈奉書如例。連々御芳志爲悦珍重相半也。折殊勝也。

(10.2) 永享4年3月11日 […] 抑禁裏鴻一若宮へ被進。自武家被進云々。花見花頂破子也。又自入江殿破子一合方丈へ被進。源氏明石心也。殊勝々々。抑清賢突鼻事。[…]

(10.3) 永享8年8月12日 […] 抑公方渡御要脚更不沙汰出之間。西雲申談之處。上様御具足密々申出云々。蒔繪手箱一合。<sup>藝莊具足。鏡以下入。</sup>食樓<sup>別。紅人形極鉢。</sup>借給。殊勝重寶也。

作者が永享3年4月13日条に記したように、その日、色々な茶子の入った、花などで飾った折り箱の六合が室町殿に贈られ、極めて美しかったことがうかがえる(10.1を参照)。そして、永享3年の春に、將軍足利義満と藤原慶子<sup>よしこ</sup>の娘である入江殿が方丈に破子一合<sup>わりこ</sup>を進上したということである。その破子は『源氏物語』の〈明石〉帖の場面を映し出したため、著しく見事なのであると

貞成は記録した（10.2を参照）。永享8年8月12日付けの蒔絵で飾った手箱一合に記事にも、「殊勝重寶」（殊に上品で貴重な什物）とある。一方、箱の多様性のため、『源氏物語』では、〈蓬生〉帖に見られるように（11を参照）、侍従が叔母に従って離京したところ、姫君は自分の九尺余りの長さの髪の毛の抜け落ちたのを集め、たいそう見事で風流な箱に入れて、また昔の薰衣香の香ばしい一壺を添えて与えた、と記されている。

### (11) 『源氏物語』

〈蓬生〉かたみにそへ給ふべき身馴れ衣も、しほなれたれば、年経ぬるしるし見せ給ふべき物なくて、我御髪がの、落ちたりけるを、とりあつめて、鬢にし給へるが、九尺餘ばかりにて、いと、清らなるを、をかしげなる箱に入れて、昔の薰衣香の、いとかうばしき、一壺具して、たまふ。<sup>28</sup>

雑多な箱のほかに、扇・織物・箸などにも、「殊勝」であるものという記述がある。まず、以下の記事をみてみよう。

### (12) 『看聞御記』

応永27年6月12日 晴。用健來臨。團扇一本賜之。奈良細工所爲歟。殊勝也。

貞成親王が記したように、応永27年6月12日には、作者の異母弟である臨濟宗の用健ようけんしゅうけん周乾が来訪し、団扇の一本を贈ったとある。きわめて美しい団扇であり、恐らく奈良の細工がつくったものだろうと貞成は評価した。

また、永享7年3月11日には、「昨日鞍馬花御覧」（昨日、鞍馬に花見に行った）と記され、その後に彼が聞いたように、彩色の絵で飾った棚一脚や種々の置物が内裏に献上され、すべて風流な珍品で言いようもなく優れているのが

はっきりしている。

### (13) 『看聞御記』

永享7年3月11日 […] 内裏へ棚一脚。嶋御盃臺等被進。棚<sup>櫛</sup>色。種々置物。言語道斷殊勝風流云々。 […]

### (三) 書画にかかわる件

貞成親王の文化活動として広く取り上げられているのは、年中行事や連歌会や猿楽等のような芸能の鑑賞である。しかし、彼は絵巻などにも非常な興味を寄せていた<sup>29</sup>。貞成による絵画の鑑賞などを中心とする記述はずいぶん多い。

木原の研究によると、応永23年から永享4年までの期間にみる貞成親王の絵画鑑賞は、唐絵・障子絵・屏風絵等が主な対象であったと言える<sup>30</sup>。それに従って、二、三の記事を見てみよう。

### (14) 『看聞御記』

(14.1) 永享10年4月29日 […] 内裏御屏風梅尾殿御筆源氏并舞繪申出拜見。殊勝無極。又舞繪一雙<sup>繪所</sup>。申出。是も殊勝也。 […]

永享10年4月29日条に貞成親王は、相国寺のある僧侶は<sup>ほりたち</sup>針立が上手だと聞いて、彼を呼んだと記した。その上、彼は、梅尾殿の手によって描かれた屏風の源氏絵併せて舞繪の二双および繪所筆の舞繪の一雙を申し出たと記録した。両者の屏風絵はとりわけすぐれた美術品であった。ところで、屏風絵については、『源氏物語』の〈若紫〉帖で、

### (15) 『源氏物語』

〈若紫〉御屏風どもなど、いとをかしき繪をみつゝ、慰めておはするも、はかなしや。<sup>31</sup>

とある。源氏が紫の君を盗み取る場面であるが、ここで作者は、紫の君について、機嫌を良くしてあどけなく、屏風にあるとても素晴らしい絵に似ていたと書いた。

なお、貞成親王は、障子絵についても述べている。日記において、障子絵は殊勝であるという記録は三つの用例がある。以下には、その三例のうち二つを引用する。

### (16) 『看聞御記』

(16.1) 応永 30 年 2 月 5 日 雨降。行豊朝臣相傳手本數卷持參入見參。賢聖障子繪圖中書。銘行俊卿書之。今在內裏殊勝也。[…]

(16.2) 永享 3 年 10 月 23 日 聊休息廳入堂。局へ寄輿下。御心靜看經燒香禮拜。觀音經御願書上分等世尊院主奉納。所作畢所々巡禮。一堂ニ弘法大師御影。石山内供淳祐御影等拜見。障子ニ石山縁起繪圖之。殊勝也。凡靈石等異于他殊勝。渴仰彌深。[…]

上記には、貞成は、応永 30 年 2 月 5 日に、歴代伏見殿近臣で能書家である世尊寺行豊ゆきとよが相伝されている数巻の手本を持ってき、彼はそれを見に行つた。また、賢聖障子絵の中書なかがきを鑑賞できたので、きわめて立派な絵画であったと評価した。これと同じような深い印象を受けたことについては、彼が永享 3 年 10 月 23 日に巡礼に出た時にも言及している。当日、貞成は障子に画かれた石山寺縁起絵を鑑賞する機会があつて、殊勝な絵であると書き記した。

さらに、日記に記述された色々な絵画の種類の間には、蒔絵などに関する記事も見出せる。

### (17) 『看聞御記』

永享 4 年 6 月 16 日 雨降晡晴。[…] 自入江殿有御使。何事乎不審。自室町殿饅頭折一合。茶子折色々六合。有茶。繪色々殊勝也。西雲被執進。御返事申握翫

無極。[…]

永享4年6月16日条に親王は室町殿から贈られた折り箱やさまざまな茶子の折り箱の六合に触れている。それらの外観を、「有蓋。繪色色殊勝也。」（蓋があり、絵はとりわけて見事だ）と細かに説明し、非常に気に入った様子がかがえる。

ここで対照のため、『枕草子』にみられる蒔絵にかかわるくだりを見てみる。

### (18) 『枕草子』

〈第二一九段〉[…] 男はまして文机清げに押し拭ひて、重ねならずば、ふたつ懸子の硯のいとつきづきしう、蒔繪のさまざまわざとならねどをかしくて、墨筆のさまなども、人の目とむばかりしたてたるこそ、をかしけれ。[…]

ここには懸子の硯にある蒔絵が描かれ、技巧を凝らす美しい飾り絵であったことがわかる。

続いて、絵画の画題が多岐にわたっている点について述べている。このように、絵に対して「殊勝」という表現を使用する場面は、相当多くあると考えられる。

### (19) 『看聞御記』

(19.1) 応永32年11月4日 晴。玄忠參。一樽持參。抑眞乗寺殿常磐繪二篇賜之。殊勝繪也。詞筆跡白河三位經朝卿云々。行豊見之被卿筆跡之由申。此繪眞乗寺所持云々。

(19.2) 永享3年11月15日 晴。自禁裏正安朝觀行幸繪一卷被下。殊勝畫圖也。拜見畏悦。魚味等被下。賞翫無極。[…]

(19.3) 永享5年6月12日 晴。自内裏繪一合被下。弘法大師繪十卷。金剛手院繪也



聖護院繪也  
智證大師繪五卷拜見。殊勝也。[…]

- (19.4) 永享5年6月16日 晴。茶事東御方申沙汰如例。内裏御繪返上。又一合被下。八坂法觀寺塔縁起繪三局。聖廟御繪六卷。義湘大師繪四局。青丘大師繪二卷被下爲悦。八坂繪殊勝畫圖也。
- (19.5) 永享6年5月25日 晴。早旦夜前勝負付之。[…] 西斜百韻了自内裏粉河觀音縁起繪三局且被下。畏悦殊勝之繪也。自室町殿被進云々。[…]
- (19.6) 永享10年12月3日 […] 抑自室町殿御繪二卷給。此詞伏見院宸筆云々。實否御不審定可存知歟。見て可申之由。女中より内々承。清少納言枕双子繪也。殊勝也。宸筆雖相依不分明。慥御筆とハ不存。源中納言同前申。若萩原殿進子内親王御筆歟。繪も同前歟。其も不分明之間。宸筆とハ慥不拜見之由御返事申。御繪廳返進了。[…]

上に列挙した例は、日記の中に絵画が出てくる記事の一部にすぎない。もっとも、これも貞成親王が絵画の愛好者であったことを明白に示している。貞成が特に勝れて美しいという感想を残したのは、後伏見朝の正安2年1月11日に行われた行幸を描く正安朝観行幸絵(19.2)、弘法大師絵と智證大師絵(19.3)、八坂法觀寺塔縁起絵や粉河寺觀音絵起絵(19.5)、及び、もともとワンセットとして室町時代初期まで原形のまま高山寺の経蔵に伝えられてきた義湘大師絵四巻と青丘大師絵二巻という二つの絵巻(19.4)等々である。一方、『源氏物語』の主人公も、絵合を催していた時、『宇津保物語』の場面を描いた絵について触れ、飛鳥部常則の絵は、唐土と日本とを取り合わせて、ずいぶんと今風で趣があり、やはり並ぶものがないと描写している(20.1を参照)。

## (20) 『源氏物語』

- (20.1) 〈繪合〉 ぬは巨勢相覽、手は紀貫之書けり。かむ屋紙に唐の綺を陪して、赤紫の表紙、紫檀の軸、世の常のよそひなり。「俊蔭は、はげしき浪風におぼほれ、知らぬ國に放たれしかど、猶、さして行きける方の心

ざしもかなひて、つひに、人の朝廷にもわが國にも、ありがたき才のほどをひろめ、名をのこしける古き心をいふに、繪のさまも、唐土と日の本とを取り並べて、おもしろき事ども、猶、ならびなし」といふ。白き色紙、青き表紙、黄なる玉の軸なり。繪は、常則、手は道風なれば、今めかしう、をかしげに、目も輝くまでみゆ。左は、そのことわりなし。次に、伊勢物語に正三位を合はせて、また定めやらず。これも、右は、おもしろく賑はしく、内裏わたりよりうちはじめ、近き世の有様を書きたるは、をかしう、見所まさる。<sup>20)</sup>

(20.2) 〈若紫〉をかしかりつる、人のなごり變しく、獨りゑみしつつ臥し給へり。日高う大殿籠り起きて、文やり給ふに、書くべき言葉も、例ならねば、筆うち置きつゝ、すさび居給へり。をかしき繪などをやり給ふ。<sup>21)</sup>

『看聞御記』の作者は絵画以外にも、手跡の美しさを珍重したようである。それを証明するように、数多くの記録の中に「殊勝」という言葉が出てきて、実に興味深い。

## (21) 『看聞御記』

(21.1) 応永 32 年 9 月 28 日 […] 抑善理申下司田地一反事賜安堵之處。本主轉歡勝寺就畠山大夫入道歡申間。自彼被口入善理無力歡勝寺へ去渡云々。仍自寺家申安堵了。其禮手本一卷後密院御消息獻之。此宸筆未見及之間殊爲悦殊勝御筆也。[…]

(21.2) 永享 4 年 1 月 8 日 […] 内裏勅報拜見令祝着。鶺鴒一被下畏悦。勅筆殊勝。年少之御手跡と難申。始終可爲御能書歟。珍重々々。

(21.3) 永享 7 年 1 月 29 日 […] 抑昨日御懷紙申出以三條申出披見。懷紙内陰下繪。執筆手跡殊勝殊勝。則面々寫之返進。[…]

貞成が応永 32 年 9 月 28 日に記したように、その日は安堵の儀式が行われた。

親王は、その行事に関係がある手本一卷を手に入れ、高倉院の宸筆の消息であると書き留めた。また、最後に「殊勝御筆成」（この宸筆はたいへん見事である）とある。

一方、姫君たちの手習いなど稽古することや殊に優れている巧みな筆遣いについては、中古・中世の文芸諸作品においても言及がある。『源氏物語』の〈浮舟〉帖所収の記述がその一例である（22.2を参照）。

## （22）『源氏物語』

（22.1）〈若菜下〉御返（り）、「今は、かくしも通ふまじき御文のとちめ」と思せば、あはれにて、心とどめて書き給ふ。墨つきなど、いとをかし。「常なき世とは、身一つにのみ知り侍りにしを、「おくれぬ」とのたまはせたるになむ、げに、[…]とあり。濃き青鈍の紙にて、櫛にさしたまへる、例のことなれど、いたく過ぐしたる筆づかひ、なほふりがたく、をかしげなり<sup>34</sup>。

（22.2）〈浮舟〉硯ひき寄せて、手習などし給ふ。いと、をかしげに書きすさび、繪などを、見所多く書き給へれば、若き心地には、思ひも移りぬべし。<sup>35</sup>

匂宮と浮舟が一日を仲睦まじく過ごしていた頃、匂は、硯を引き寄せて、手習いなどをしはじめた。極めて美しそうに書き遊んで、絵などを上手にたくさん描いたという話がある。

## （四）娯楽にかかわる件

貞成親王の日常生活は、熊倉功夫の意見によれば、「まさに中世芸能の回り舞台のようなもので、つぎからつぎへと芸能と遊びが日記に登場して、その日常生活を一層はれがましいものにする。あるときは今様、朗詠、あるいは早歌に楽。猿楽の見物をもっとも頻繁で、田楽、狂言、獅子舞、曲舞、放下、品玉

……、あげていったらきりがなほどの芸能が演じられ」<sup>36</sup>たのである。その娯樂の多様性の中には、勿論、演奏もある。

日記の永享3年8月28日条によると(23.3を参照)、親王は、幾人かの近侍と連れだつて興行に参加した。それに際しては、貞成が列挙しているように、平調万歳樂の三台急や甘州、太食調の太平樂急、高麗平調の林歌、盤涉調の採桑老・万歳樂急・輪台・青海波等々の古樂の中曲、すなわち雅樂を奏でることが多かつたようである。また、親王と彼の同伴者はその催し物に積極的に参加した。貞成は琵琶を弾き、豊原郷秋と彼の二人の子である峯秋は笙を吹き、言秋は大鼓を打つたという場面が見られる。親王が強調したように、その見事な演奏を聴いたり、奏樂に興じることそのもの等も、果たして風流で殊に優れているのである。

### (23) 『看聞御記』

(23.1) 応永23年4月13日 晴。[……] 郷秋參。有樂。平調万歳樂。三臺急。泔洲。太平樂急。五常樂急等也。源宰相退出之間無笛。無念也。三位打大鼓。琵琶無異失。殊勝之由郷秋申。[……]

(23.2) 永享3年8月28日 晴。[……] 蘇合急。輪臺青海波。千秋樂。笙郷秋。峯秋。笛景藤。琵琶予。大鼓言秋。景藤。季久初參。樂初而聽聞殊勝也。樂了賜盃。[……]

琵琶や琴による美しい音楽や演奏については『源氏物語』の〈明石〉や〈東屋〉帖においても記述を見出すことができる。その後者には(25.2を参照)、薫と浮舟の琴を弾いて語るといふ場面がある。明るい月が出たその時に、浮舟は琴を奏ではじめた。薫は、なくなった宮を思い出しつつ、「宮の琴の音色が仰々しくはなくて、とても美しくしみじみと弾きましたなあ」と思い込んでいたとある。

## (24) 『源氏物語』

(24.1) 〈明石〉 ふる人は、涙もとゞめあへず、岡邊に、琵琶、箏の琴、とり  
にやりて、入道、琵琶の法師になりて、いとをかしう、珍しき手、一つ  
二つ、弾きたり<sup>37</sup>。

(25.2) 〈東屋〉 […] 月さし出でぬ。「宮の御琴の音の、おどろへしくはあ  
らで、いと、をかしう、あはれに弾き給ひしはや」と思し出で、 […]<sup>38</sup>

さて、次に、色々な興行について概観しておこう。伏見庄のひととせの中で、とくに際立つ行事の一つは御香宮神社の猿楽であった。御香宮は、伏見庄各村共通の鎮守であったので、原則として春は三月十、十一日、秋は九月十、十一日の例祭式日に猿楽が催されていた。横井清によると、「このお社での猿楽は「がくとうしき楽頭職」（保証された上演権）を保持していた撰津の矢田（八田）猿楽の一座が行うのが永年の習わしであったが、応永二十二年（一四一五）に楽頭の「八田愛王大夫」が罪科を問われて八田庄を追放される一件があり、やむなく伏見庄に「隠居」した。御香宮の楽頭には違いないから神事の執行には携わったものの、猿楽には関与しなかった」とある<sup>39</sup>。さらには、永享9年3月13日条に「猿楽大千世法鏡寺御免。矢田ニ歸住。仍參。猿樂殊勝云々。」とあり（26.2を参照）、愛王大夫の子大千世は宝鏡寺に許されて矢田に帰っており、ここでも猿楽は興味深く面白かったということがわかる。ところで、永享9年3月11日条を見てみると、貞成は「御香宮猿楽神事無為云々」（御香宮における猿楽や神事は平穩無事だったそうである）と記した。

## (26) 『看聞御記』

(26.1) 永享4年8月7日 晴。大嶋事西雲可伺申云々遣書狀。廣橋も近日必可披露之由申。自内裏アヤツリ燈爐一被下。一谷合戰鴨越馬追下風情也。殊勝アヤツリ言語道斷驚目了。自室町殿被進云云。自南都進奈良細工。  
[…]

(26.2) 永享9年3月13日 晴。長講堂御經供養如例。着座公卿不參。奉行權弁長淳參。近年公卿着座無之。御無沙汰之至歟。重賢歸參。猿樂大千世法鏡寺御免。矢田ニ歸住。仍參。猿樂殊勝云々。

(26.3) 嘉吉3年3月18日 […] 今日於亭子院有勸進猿樂。可有三ヶ日云々。觀世仕。棧敷大名共見物。方人群集云々。殊勝之由見物之人語之。[…]

猿樂のほか、貞成親王は民俗芸能で操り人形の一種である操り灯籠などについて述べている（26.1を参照）。永享4年8月7日条によると、親王は内裏所有の「アヤツリ燈爐」を賞翫することができた。また、一ノ谷<sup>いちのたに たなか</sup>の戦い、つまり平安時代の末期の摂津国福原および須磨で行われた戦いの一場面となる鶴越<sup>ひよどりこえ</sup>（源義経が平家に奇襲攻撃を行う際に越えた難所）に関する描写では、言葉で言い表せないほど美しかったと貞成が、その風情を評価している。

ところで、上述のような興行の多様性は、『枕草子』にも見られる。作者清少納言によると、神楽や駿河舞なども「いとをかし」「いみじうをかし」の行事であったと考えられる。

## (27) 『枕草子』

〈第四七段〉 […] 榊、臨時の祭、御神樂のをりなどいとをかし。[…]

〈第七九段〉 まして、臨時の祭の調樂などは、いみじうをかし。[…]

〈第一四五段〉 […] 臨時の祭の御前ばかりの事は、何事にかあらん。試樂もいとをかし。

〈第二〇〇段〉 舞は駿河舞。求子。太平樂はさまあしけれど、いとをかし。[…]

以上みてきた伏見御所の生活文化の多くが、恒例の行事となっており、親王がその行事に主体的に関わっていたことは言うまでもない。奏樂・猿樂・茶会をはじめ、貝覆・文字書・双六・小弓会・鬮鶏・あるいは臨時の連歌会など御

所で行われる行事の多くが、勝負の競技でもあり、賭け物が出されるのが常であった。<sup>④</sup>遊戯の中から、例えば手鞠を見てみよう。永享9年3月28日条によると(28.2を参照)、天気が晴れているとき、手鞠であそぶのは、興味深く面白いという話がある。

## (28) 『看聞御記』

(28.1) 永享3年1月13日 晴。葉室中納言參賀。[…] 御留守之由仰。然而環御可待申之由申不罷出云々。仍忿歸。猿樂入夜仕。手鞠等其藝甚殊勝堪能也。祿物男共面々賜之。雜人群集。

(28.2) 永享9年3月28日 […] 抑今夕内裏内内御鞠初也。非晴之儀。御人數按察大納言。三條大納言。飛鳥井中納言。中御門中納言。三條中納言中山宰相。各直。雅長朝臣。資親朝臣。資任。雅親。醫上人。衣賀。茂人重藤。社務。秀尚。天氣快晴御鞠殊勝云々。千秋万歳之御遊初。殊珍重也。自室町殿廳御馬御劔被進。御鞠人數も御劔公御銀劔。殿上人黒太刀云々。進之。[…]

(28.3) 永享6年1月5日 […] 抑自室町殿鴿一。捶十給之。毎年佳例云々。令祝着。宮御方へ球枚三枝。玉五。色々。こき板二。時繪置物。繪等風流。こきの子五被進。言語道断殊勝驚目了。御自愛無極。若宮まで被入思食。[…]

「殊勝」な遊戯としては、永享6年1月5日条にみられる「こきの子」という遊びもある。横井の説明によると、「こぎの子というのは、要するに羽根。そのこぎの子(胡鬼子)を板(胡鬼板)でつくのだから、要するに羽根つきの遊びなのである。」<sup>④</sup>貞成親王が記したように、「將軍家から伏見御所の若宮貞常(貞成の二男)に贈られた品々には、毬杖三枚、いろいろ彩色の玉五つ、こぎの子五つに併せて、「葺絵置物、繪等風流」の「こき板二」があって、貞成親王を「言語道断(言いようもなく)殊勝、目を驚かしたるぬ」と感激させるほど立派なものだった」<sup>④</sup>とある。

それに加えて、平安朝貴族の文学を見てみると、そこにおいても雑多な遊び

の見事さが描かれている。その一例は、

### (29) 『源氏物語』

〈澁標〉院は、のどやかに思しなりて、時々につけて、をかしき御遊びなど、好ましげにておはします。<sup>43</sup>

とある。ここでは、「御遊び」は集的に「をかしき」という言葉で描かれているが、具体的な遊びの場合にも同様であると考えられる。

貞成著の『沙玉和歌集』にみるように「応永十八年四月に伏見殿へまいりて今はさふらふほどに、御歌の会しげくて…」とある。つまり、「月次」（月例）の歌会や連歌会が御所生活の中心をなしたことがわかる<sup>44</sup>。以下の（30）の三つの条にみる「愚詠殊勝」「御詠殊勝」などのような表現は、『看聞御記』の作者は、歌を詠むことのみならず、歌を評価することも好きだったらしいということを示している。

### (30) 『看聞御記』

(30.1) 応永 24 年 4 月 8 日 〔…〕先日愚詠殊勝之由。返々被褒美。〔…〕

(30.2) 応永 27 年 7 月 8 日 晴。用健來臨花被一見。抑聞。仙洞御花合七十七瓶云々。〔…〕御連歌院御發句。松ならぬ梶にもそふか手向草又聞。石橋七夕發句。

さは鹿の星の逢夜やともし妻  
連歌師共殊勝之由褒美云々。又四條聖發句。

梶の葉にまた七種の花もかな  
是も殊勝云々。〔…〕

(30.3) 永享 4 年 11 月 14 日 晴。〔…〕自入江殿法樂哥詠給。祝言哥二。

君か代は浪もしつかになりけり  
はや玉みかけ和哥のうら人



此御詠殊勝之間御返事申。[…] 後聞。法樂哥前關白條。被詠申被詠云々。  
仍殊勝也。

『看聞御記』における貞成の歌に対する評価を平安時代以降の作品にみられる歌に対する評価の表現と比較すれば、ここにも、美しい歌、趣のある歌に対しては、「をかし」という言葉がしばしば用いられていた。その一例が、『徒然草』の〈第十四段〉(33を参照)、「和歌こそ、なほをかしきものなれ」(和歌こそ面白い)である。

### (31) 『枕草子』

〈第二五八段〉歌は杉たてる門。神樂歌もをかし。今様はながくてくせづきたる。風俗よくうたひたる。

### (32) 『源氏物語』

(32.1) 〈帚木〉「歌詠む」と思へる人の、やがて、歌にまづはれ、をかしき古事をも、はじめより取り込みつゝ、すさまじき折々、詠みかけたるこそ、物しきことなれ。返(り)事せねば情なし、えせざらむ人は、はしたなからん。<sup>45)</sup>

(32.2) 〈賢木〉くはしう言ひつゞけむに、ことへしきさまなれば、漏らしてけるなめり。さるは、かうやうの折こそ、をかしき歌など、出で来るやうもあれ。<sup>46)</sup>

(32.3) 〈蓬生〉古歌とても、をかしきやうに選り出で、題をも讀人をも、あらはし、心得たるこそ、見所もありけれ、うるはしき紙屋紙・陸奥紙などのふくだめるに、ふることゞもの、目馴れたるなどは、いと、すさまじげなるを、せめてながめ給ふ折々は、引(き)ひろげ給ふ。<sup>47)</sup>

### (33) 『徒然草』

〈第十四段〉和歌こそ、なほをかしきものなれ。あやしのしづ・山がつのしわざも、いひ出つればおもしろく、おそろしき猪のしゝも、「ふす猪の床」といへば、やさしくなりぬ。<sup>48)</sup>

なお、宗教にかかわることに対しても、貞成親王が「殊勝」という表現を用いた記録が少なくない。懺法せんぼうや説法せつぼうの儀式をみると、応永27年8月23日に開催された懺法には(34.2を参照)、十六人の僧侶衆が参加した。ことさらに面白かった行事だと親王が書き記した。これと同様の懺法会の記述は、(34.3)の条などに見られる。

### (34) 『看聞御記』

(34.1) 応永23年12月24日 […] 亥剋懺法始之。導師勸王院主洪西堂香花天龍寺瑑首座。僧衆恨西堂。繼首座指月坊主。廓首座。乾藏主。蔭藏主。藏光庵主訓藏主。華藏主。禪藏主。周書記。長老衣鉢侍者。維那。警侍者等十四人也。懺法事更殊勝。催感涙。幽靈定隨喜御歎。[…]

(34.2) 永享4年2月29日 […] 則懺法初。導師慢西堂。香華稱藏主。僧衆十九人。懺法殊勝也。丁聞畢燒香。[…]

(34.3) 永享5年2月30日 晴。故用健明日第三廻也。大通院有佛事。[…] 僧衆四十人。次觀音懺法。導師長老。香華稱藏主。天龍寺用健法眷。懺法衆廿人。殊勝也。聽聞了歸。[…]

仏教の教義を説き聞かせる会である説法が、親王を感激させた記事も多い。応永27年8月4日に、貞成は法安寺へ行き、興味深い説法を聞かせたとある。また、法安寺の再訪、光台寺への参詣なども、談義と説法を聞かせる機会であった。応永27年9月15日付け日記には、(35.3を参照)、妙法蓮華経観世音菩薩普門品の説法が行われ、殊にけなげで見事な衆会であり、また「隨喜」

(大喜びをした) とある。

(35) 『看聞御記』

(35.1) 応永 27 年 8 月 4 日 晴。法安寺ニ參。[…] 說法殊勝也。談議畢法華經一品同音讀之。[…]

(35.2) 応永 27 年 8 月 23 日 […] 今日見寶塔品也。[…] 聽衆眞俗群集。說法殊勝。弁說如通。言句吐玉。隨喜無極。[…]

(35.3) 応永 27 年 9 月 15 日 晴。持齋如例。法安寺ニ參。[…] 普門品說法殊勝。隨喜無極。

(35.4) 応永 32 年 5 月 20 日 晴。大通院參。宰相以下參昇進之後未參。殊更爲燒香參。長老謁藏光庵ニ行。坊主謁次光臺寺ニ行。談義聽聞。說法殊勝令隨喜。

貞成親王は、寺社の装飾や寺社の周辺についても書いた。永享 4 年 2 月 9 日条の記述のように (36.6 を参照)、貞成は伊勢に滞在し、また大社頭が極めて立派であると書き記した。『枕草子』や『徒然草』に出てくる寺社に対しても、「をかし」という表現が見られるが、ここで使われているコンテキストは『看聞御記』における「殊勝」に相当すると考えられる。

(36) 『看聞御記』

(36.1) 応永 26 年 3 月 6 日 […] 晴。大光明寺遊覽。殊勝也。[…]

(36.2) 応永 27 年 8 月 23 日 雨降。[…] 今日見寶塔品也。導場莊嚴。佛前左右脇東西ニ折聽聞所机數十脚立並。打敷水引花瓶五十餘瓶立之。堂中照耀殊勝也。[…]

(36.3) 永享 4 年 2 月 9 日 […] 日暮了今伊勢參着着。戊初。月清明。大社頭殊勝也。[…]

(37) 『枕草子』

〈第二二五段〉社は布留の社。活田の社。龍田の社。はなふちの社。美久理の社。杉の御社、しるしあらんとをかし。

(38) 『徒然草』

〈第二十四段〉すべて神の社こそ、すてがたく、なまめかしきものなれや。ものふりたる森のけしきもたゞならぬに、玉垣しわたして、榊木に木綿かけたるなど、いみじからぬかは。ことにをかしきは、伊勢・賀茂・春日・平野・住吉・三輪・貴布祢・吉田・大原野・松尾・梅宮<sup>49</sup>。

宗教にかかわる数多くの記録においては、寺社の本尊を描くこともある。永享7年4月1日条で、(39.1を参照)貞成は、蓮華王院へ行き、その次に本堂の中に入り、そこにある本尊を見たら立派な像だったと記録している。さらに、永享10年2月13日条にあるように(39.4を参照)、親王は後白河院の院御所である六条殿内に建立された長講堂の本尊である涅槃像を見ることができた。この時も、その像は立派であると記録した。

(39) 『看聞御記』

(39.1) 永享7年4月1日 […] 今日八留。北野社參。次蓮華王院參。下興御堂内ニ入本尊拜見。緑色半分許出來。殊勝也。伏見歸宅。[…]

(39.2) 永享8年6月15日 […] 抑妙音天像累代本尊。可拜見之由僧正被申之間令見之。伴僧共同拜見。大威徳秘尊同拜見。殊勝異于他之由褒美被申。[…]

(39.3) 永享8年11月13日 […] 不動出來爲拜見也。佛鉢聊雖存無殊儀。殊勝々々本尊也。[…]

(39.4) 永享10年2月13日 […] 長講堂本尊涅槃像被入見參。殊勝像也。

以上、ここまで扱っていない様々な物事も「殊勝」の対象となっている。例えば、永享5年1月8日条によれば、親王は、内裏で行われる元服の儀式に出席した時、「龍顔殊勝」（龍顔、すなわち天皇の顔は、殊に美しかった）と書き記した。

#### (40) 『看聞御記』

- (40.1) 応永23年5月29日 晴。常樂會。花臺。家壇糖寺在之。寶泉進上被召置。殊勝也。
- (40.2) 永享4年1月16日 […] 今夜逗留夜子刻歟。侍從實勝爲御使參。御贈物賜之。練貫五重。堆紅益。花彩殊勝物也。一。[…]
- (40.3) 永享4年9月13日 […] 自岡殿宮御方へ廻燈爐一被進。結構殊勝也。室町殿。上様。入江殿へ被進燈爐云々。
- (40.4) 永享5年1月8日 晴。葉室中納言參。衣冠。對面。於殿上賜盃。長講衆々參。晚景局面々被歸。内裏拜見。御成人御元服龍顔殊勝之由被語。昇御宮筥。右衛門督御宮筥等有盃酌。惣得菴參。一獻持參如例。
- (40.5) 永享7年7月29日 […] 唐硯。百華堂。白泥金。文。唐花唐鳥。無筆臺。珍物殊勝頗重寶也。[…]

### 結び

こうしてみると、「殊勝」の対象は広範囲にわたると考えられる。それでも、おおよそ次のようなことが確認できそうである。

- (a) 「殊勝」と「をかし」の対象を比較すると、ほとんどのグループにおいて、「殊勝」は「をかし」が出てくる同様の場面や文脈で用いられていることが見てとれる。
- (b) 「殊勝」の表現は、作者貞成親王が、書画について述べている記録に主に見出せる。「殊勝」は、書画に関する用例が三分の一以上を占めている。すなわち、日記にみられる「殊勝」の用例233のうち、約36%が絵

画や能筆などに対して用いられている表現である。

- (c) 自然を対象に「殊勝」という言葉を使用した記述も相当に多く、その用例数は17%を占める。これは、宗教に関する用例とはほぼ同数である。しかし、宗教にかかわる「殊勝」の用例とは異なり、月や花の美しさを記述するくだりにおける「殊勝」は、意味上で「をかし」に符合する。

以上、総括すると、『看聞御記』における「殊勝」は、ほとんどの場合、「をかし」美意識の意味で用いられていた言葉であると考えられる。この語が出てくる場面の多様性をみる限り、さらには、これを『満濟准后日記』などのような同時代の他の作品と比べると、貞成親王個人が好んで用いた口癖より、むしろ当時、普通に用いられていた表現であると言えよう。

#### [注]

- ①横井清『室町時代の一皇族の生涯』講談社、平成14年、22頁
- ②諸橋轍次『大漢和辞典』第六卷、大修館書店、昭和61、747頁
- ③鎌田正・米山寅太郎『新漢語林』、大修館書店、平成23、718頁
- ④『漢字源』藤堂明保・松本昭・竹田晃編、学習研究社、昭和63、647頁
- ⑤『源泉国語大辞典』、小学館、昭和62、114頁
- ⑥簡野道明『字源』、角川書店、昭和62、1021頁
- ⑦『古語辞典』大野晋・佐竹昭広・前田金五郎編、岩波書店、昭和55、660頁
- ⑧新版『古語辞典』松村明・今泉忠義・守随憲治編、旺文社、昭和56、613頁
- ⑨木村宣彰「生活の中の仏教用語：殊勝」、[http://www.otani.ac.jp/yomu\\_page/b\\_yougo/index\\_bn.html](http://www.otani.ac.jp/yomu_page/b_yougo/index_bn.html)（閲覧日：2012.10.14）
- ⑩岩波『古語辞典』の解説によれば好意を以て招き寄せたい気がする意を表現する「動詞ヲキ（招）の形容詞形」説があるし「をかし」を「をこ（愚）」の形容詞化と見る説もあるが、道化て馬鹿馬鹿しく、あきれていやに思う気持の例はなく、むしろ好意的に興味を持って迎えたい気持で使うものが多い」とある。「をかし」の意味合いは、①招き寄せたい。喜んで迎え入れたい。②興味がひかれる。面白い。③美しく心がひかれる。魅力がある。④可愛らしい。⑤すばらしい趣がある。⑥面白くてつい笑いがこぼれる感じだ。⑦笑うべきである。変わっている等があげられている。前掲書、1413頁を参照。
- ⑪根来司「枕草子の文体——「見立て」と「をかし」——」『国語と国文学』51、昭和49、14-24頁
- ⑫土屋博映「『枕草子』の「をかし」の価値」『跡見学園短期大学紀要』第22集、昭和60、1-8頁
- ⑬旺文社『古語辞典』の前掲書、1234頁を参照
- ⑭『徒然草』『日本古典文学大系』30、岩波書店、昭和32、279頁。本稿における全ての傍点は、指摘がない場合、筆者の付加したものである。
- ⑮同書、99頁

- ⑩同書、100 頁
- ⑪同書、105 頁
- ⑫横井清『室町時代の一皇族の生涯』講談社、平成 14 年、246-247 頁
- ⑬本稿では「統群書類従」補遺二の『看聞御記』を用いる。
- ⑭『源氏物語』「日本古典文学大系」14、岩波書店、昭和 33、237 頁
- ⑮『更級日記』「日本古典文学大系」20、岩波書店、昭和 32、519 頁
- ⑯市野千鶴子「伏見御所周辺の生活文化——看聞日記にみる——」『書陵部紀要』33 通号、宮内庁書陵部編、昭和 56、31 頁
- ⑰『更級日記』、前掲書、526 頁
- ⑱『源氏物語』「日本古典文学大系」17、岩波書店、昭和 37、265 頁
- ⑲『源氏物語』「日本古典文学大系」18、岩波書店、昭和 38、186-187 頁
- ⑳『徒然草』、前掲書、207 頁
- ㉑横井清『室町時代の一皇族の生涯』講談社、平成 14 年、252-253 頁
- ㉒『源氏物語』「日本古典文学大系」15、岩波書店、昭和 34、149 頁
- ㉓工藤早弓「後崇光院の文学生活『看聞日記』に見られる絵巻物の享受」『国文橋』1 号、橘女子大学国文学会、昭和 48、57 頁。また、『看聞御記』に記録された絵巻などについては、芳賀幸四郎『東山文化の研究』、河出書房、昭和 20 年、158-188 頁、および木原弘美「絵巻の行き来に見る室町時代の公家社会——その構造と文化の形成過程について——」『佛教大學院紀要』23 号、佛教大學大學院、平成 7、106-157 頁などに詳しい。
- ㉔木原、前掲書、107 頁
- ㉕『源氏物語』14、前掲書、229 頁
- ㉖『源氏物語』15、前掲書、180 頁
- ㉗『源氏物語』14、前掲書、219 頁
- ㉘『源氏物語』「日本古典文学大系」16、岩波書店、昭和 36、201-202 頁
- ㉙『源氏物語』18、前掲書、223 頁
- ㉚熊倉功夫「看聞御記の茶」『日記・記録による日本歴史叢書』月報 2、そして、昭和 54、1 頁
- ㉛『源氏物語』15、前掲書、71 頁
- ㉜『源氏物語』18、前掲書、196 頁
- ㉝横井、前掲書、263-264 頁
- ㉞市野、前掲書、40 頁
- ㉟横井、前掲書、248 頁
- ㊱同書、同頁
- ㊲『源氏物語』15、前掲書、117 頁
- ㊳横井、前掲書、106 頁
- ㊴『源氏物語』14、前掲書、85 頁
- ㊵同書、403 頁
- ㊶『源氏物語』15、前掲書、141 頁
- ㊷『徒然草』、前掲書、100 頁
- ㊸同書、110 頁

#### \* 討議要旨

村尾誠一氏は、発表者が「殊勝」と「をかし」の用例の分類を行ったことを評価し、また、「をかし」の用法が 15 世紀ごろから「殊勝」へ転じたとしたことの論拠について質問した。発表者は「殊

勝」の和文での用例は『古今著聞集』に数例、『徒然草』に1例あることを応答した。村尾氏は、歌合判詞での「殊勝」の用例等を指摘し、漢文脈と和文脈の違いを意識した考察を発表者に助言した。山下則子氏は、発表者による『看聞御記』永享4年8月7日の項に記された「アヤツリ燈爐」に対する「殊勝」の用法と『枕草子』における神楽に対する「をかし」の用法の対比を例に挙げ、和文と漢文の違い、及び時代背景の違いを考慮すれば興味深い考察になると助言し、また、「アヤツリ燈爐」とはどのようなものかと質問した。発表者は人形芸の一種と思われるが詳細不明と応答し、武井協三氏より「回り灯籠」の一種との助言がなされた。